

# 少年メッセージ 2024

～ 西牟婁地方作品集 ～



西牟婁地方青少年育成市町民会議連絡協議会

## はじめに

平素は青少年健全育成活動にご理解とご支援を賜り、厚くお礼申し上げます。

さて、(公社)和歌山県青少年育成協会が主催する「少年メッセージ2024」に、今年度は田辺・西牟婁地方の中学校14校から1,022点の応募をいただき、7月27日に上富田文化会館において開催された県審査会の結果、優秀賞1点、入賞3点を受賞しました。

応募をいただきました生徒の皆さんと、ご指導下さいました先生方に改めて感謝申し上げます。

今回の応募には、学校や部活動、家族のことなど、普段の生活から感じたことや考えたことを素直に表現したものから、性の多様性について、戦争と平和について、少子高齢化について等の時事に関して意見を表明したもの、その他ユニークなテーマや主張のものまで数多くの作品が寄せられました。

優秀賞となった作品を紹介します。

岡本さんは、大工になりたいという夢を叶えるために、自分の苦手なことやこれまで避けてきていたことに一生懸命に取り組みました。親に納得してもらうためにも自分を変える「決意」をしたという、思いのあふれる作品です。

入賞となった3名の作品を紹介します。

河原田さんは、学校生活の些細な出来事で自分自身の心のモヤモヤが爆発してしまい、気持ちが落ち込んでしまいました。そんな中、親友や先生方の気付きや声掛けで気持ちが軽くなりました。辛いときには周りを頼ってほしいという願いを込めた作品です。

北川さんは、後ろ向きに考えてしまう自分を変えようと「ごめん」という言葉よりも感謝を伝える「ありがとう」を自然に言えるようになりたいという思いを述べています。自分の良いところは生かして、普段の生活から自分を少しずつ変えようとしている思いが伝わる作品です。

宮原さんは、手話と出会い、手話について調べ、間近で手話を使っている人たちの会話を見ることで、手話とは「自分の気持ちをより細かく相手に伝えるため」だと感じました。手話に興味を持ち、勉強中だそうです。発表にも手話を用いていました。手話を使ってコミュニケーションをとりたいという思いのあふれる作品です。

中学生の皆さんの瑞々しい考えに触れることができ、うれしく思います。

本冊子には、当地方に応募いただいた作品の中から、和歌山県大会入賞作品4点、西牟婁地方金賞作品4点、西牟婁地方銀賞作品6点、西牟婁地方銅賞作品5点を掲載しています。中学生の思いあふれる作品に触れることで青少年に対する理解を深め、次代を担う健やかな青少年を育む社会創りの一助にいただければ幸いです。

令和6年9月

西牟婁地方青少年育成市町民会議連絡協議会  
会 長 上 羽 寛

## 目 次

### 【和歌山県大会優秀賞作品】

私の決意 大塔中学校 3年 岡本 愛栞 … 1

### 【和歌山県大会入賞作品】

心のモヤモヤ 大塔中学校 2年 河原田 桃花 … 3

「ごめん」より「ありがとう」 上富田中学校 3年 北川 智里 … 5

手話 中辺路中学校 3年 宮原 綾花 … 7

### 【西牟婁地方金賞作品】

学校生活が楽しい理由 大塔中学校 3年 稲田 桜大 … 9

温かな連鎖を増やしたい 上富田中学校 1年 梅本 剛志 … 11

一つのものだと考えて 田辺中学校 2年 坂倉 朱音 … 13

「当たり前」の社会に 中芳養中学校 2年 下向 一颯 … 15

### 【西牟婁地方銀賞作品】

僕らの世界 大塔中学校 1年 赤木 千愛 … 17

匿名性の排除 上富田中学校 3年 芝 緋呂 … 19

出店体験で得たもの 白浜中学校 3年 小森 寛太 … 21

マイヒーロー 高雄中学校 2年 中嶋 那悠 … 23

批判的な世の中に対する批判 田辺中学校 3年 古久保 瑛留 … 25

私の学校、世間の学校 三舞中学校 2年 岡田 莉空 … 27

### 【西牟婁地方銅賞作品】

人類の過ちと自分たちにできること 大塔中学校 2年 愛瀬 琉大朗 … 29

関わることで 高雄中学校 2年 杉原 日葵 … 31

将来の夢と大切にしていきたいこと 東陽中学校 1年 山本 将真 … 33

自分らしく生きる 中芳養中学校 2年 松浦 千春 … 35

宿題は必要か、またどうあるべきか 本宮中学校 3年 下西 楓太 … 37

# 私の決意

大塔中学校 三年 岡本 愛椛

突然だが、夢や好きなことはあるだろうか。そして、夢や好きなことのためににか決意したことはあるだろうか。私には、夢があり、夢を叶えるために、これまでの自分を変える「決意」をし、今それを実行している。

私は、今まで決意などしたことがなかった。正直言って、決意をしたところで何が変わるのだろうかと思っていた。そして、学校にも通えていない日々が続いていた。そんな私だったが、私が変わる、決意をするきっかけとなった夢との出会いがある。それは、「大工になること」である。

小学生の時から「やってみたい」という好奇心、興味は、少しあった。そして、今年の一月からその思いが強くなっていった。親戚の大工さんに、仕事の魅力を聞いたのだ。そして、スマートフォンで調べたり、本を読んだり、その結果、自分は本当に大工をやりたいと思ひ、そこから私は「絶対に変わる」、そう決意した。

そんな私は、行動しなければいけない大きな現実に直

面した。それは進路をどうするかということだ。

私は調べた結果、和歌山市のとある高校で大工になるための専門的な勉強ができることを知った。だが、すべてのことがスムーズに進むわけではない。母と、進路について揉めたのである。

母はこの進路に反対だった。「親戚のお兄さんの影響かもしれないけど三年間続けられるの?」「高校で探すのもありだよ。」そんな母の言葉に対して初めは、「なぜ、否定ばかりするの?」「どうせ私の話、真剣に聞いてくれないでしょ。」思っていたことを伝えた。

すると母は、私に言った。「母親としての思いを伝えているのだから、ただ否定しているんじゃない。聞いてくれないんじゃないでしょじゃなくて、ちゃんと自分の思いを伝えなきゃ。」その言葉を聞いて、私は気づいた。本当に大切なことを話せていないことに。

私は心で母に謝った。いろんな思いがわいてきた。心配してくれているのに素直に話せていなかったこと。反抗してばかりだったけど、心では「ありがとう」と思っていたこと。言えなかった。自分が変わろうとせず、受け入れてくれることを求め、自分の気持ちを伝える前に、結局その場から逃げていた私。

そんな私は、精神的に不安定だったり、ADHDなど

もあり、母には迷惑ばかりかけてしまっていた。母は学校に行かなくなっていた期間も心配し、味方になってくれていた。その母の思いに気づかず迷惑ばかりかけていた私。

私はもう一度、母に進路について一生懸命思いを伝えた。自分が、本当に興味を持ったこと。勉強も頑張るから。私には苦手なことがあるけどできないわけじゃないから。頑張るから。だから待ってて。

母はそれを聞いて、「わかった、とりあえず挑戦してみて。あなたのこれからの行動次第で考えるよ。」と云ってくれた。

この言葉をもらってから、それまでの別室登校だった私は、真剣に勉強を頑張りたいと思ひ決意をした。授業に出るといふ決意だ。今まで授業に出ていなかった分、クラスメイトとの差は開いている。不安もある。だが、本当に自分自身を変えたいと、初めてこんなに強く思い、普通教室の授業に復帰した。初めて、家庭での勉強も一日三時間近くもし、苦手だった部屋の片付け、自分で使ったものは自分で最後まで片付けた。まずは、自分でできることを、できる人になりたかった。

「大工になりたい」といふ夢は、簡単には叶わない。どの職業でも、努力や頑張りが必要だ。「女の子なら女

の子らしい仕事をしろ」や、「女の子に力仕事は無理」等、批判は多い。たしかに、女性に難しい事はある。だけれどもみんながみんなそうじゃない。「女性だから」とか「男性だから」ではなく、性別の前に一人の人間として見てほしいと私は思う。

私は行動でさらに示したくて、大工さんの現場にお手伝いに行った。仕事内容や気をつけること、たくさんのことを私は親戚のお兄さんに聞いている。時には不安なこともあり、お兄さんに、相談をしている。「大工への興味や、ものづくりが好きなこと、憧れだけで大工さんとしての仕事は続くのかな？」そう聞くと「好きとか興味がある子の方が、実際続けていることは多いよ。僕らも興味を持ってくれるだけで嬉しいよ。」そう言ってくれた。その言葉に力をもらい、夢の大工になりたいという気持ちはさらに強くなっている。

これから、迷ったり、悩んだりすることもあるかもしれないけど、この今の気持ちを大切に、努力を怠らずに、精一杯頑張っていきたい。

これが、私自身を変える「私の決意」。



# 心のモヤモヤ

大塔中学校 二年 河原田 桃花

最近、「つまらない」と思うことが増えた。「最近」だから、もしかしたらこの作文を提出した後「楽しい」と思えることが増えていくかもしれない。

いつものように朝起きて準備をして学校に行って、授業を受けて部活動をして、帰ってご飯を食べてお風呂に入って寝る。当たり前のように過ごす日常。

「つまらない。」

正直に言うとそれだけじゃない。友人関係とかも一度は悩むときがあった。そういうこととか、普段のストレスがだんだん積み重なってきたからそう思うようになってしまったのだと思う。

そして突然金曜日の学校で、あることが起きた。私は学校で泣いてしまったのだ。

そのことが起きた経緯は男子から少しあることでいじられて、私は少し腹が立った。普段とは違う私の様子にその男子は「怒らせたのかな…」と焦っていて、その

近くにいた私の親友が気遣ってくれて、直接言わずに紙に「何かあったの？」と書いた紙を渡してくれた。

私はその言葉を見た瞬間、泣いてしまったのだ。私の心のどこかにあったもやもやが爆発したと共に「誰かに気づいてもらえた」と安心したからだ。とりあえず自分で深呼吸をして何とか落ち着けた。

その後は残りの授業を受けた。なぜかその時間は些細なことでも笑えた。心の中の小さな「もやもや」が消えたからだろうか、久しぶりに授業が「楽しい」と思えたのだ。

そして部活前の時間、担任の先生と二人で話をした。先生は「心配したから」と言っていた。そして私がなぜ泣いたのかを話した。実は先生にはこのことが起きる数日前から、最近学校がつまらないということ話を話していたのだ。

だからこそ先生もある程度のこととは分かってくれていて、私の目を見てゆっくり話を聞いてくれた。そして先生は「楽しいと思えるように頑張るね」などということも言ってくれた。私はとてもうれしかった。

話し合いが終わった後とりあえず部活をして、放送の当番だったので職員室に向かった。放送を終わらせて、

職員室から出ていこうと思ったとき、副担任の先生から「ちよつと来て」と言われた。

副担任の先生は「今日桃花が泣いたって聞いたから」と言った。そして色々と話をして最後に先生はこう言った。「先生はいつでも桃花の味方だからね」と。私はこの言葉を聞いた瞬間視界が霞んだ、また泣きそうになつたとき、先生を見つめた。もしかしたら私の見間違いかもしれないが、先生の目も潤んでいた。

私は思った。「こんな素敵な先生達に本当に出会えて良かった」と。

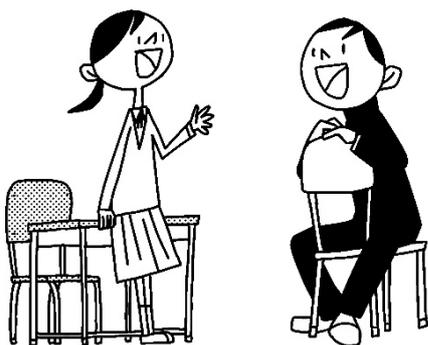
この作文を通して私はみんなに伝えたいことがある。それは、「自分の体と心を大切にしてほしい」ということだ。今は特にいろんなことについて悩む人が数えきれないほどいて、一人で抱え込んでしまったり、自分を傷つけてしまったりする人がいると思う。現在では、SNSやネットで思いを述べる人もいる。SNSやネットには、気軽さや楽しさがある。けれど、思いを述べようとすると、真剣に受け止めてくれる人もいるかもしれないが、違う意味でとらえられ、からかいや、誹謗中傷にエスカレートすることもある。悩みの解決よりも、むしろ傷つき、悩みが深まることになるのではないかと思う。

気になっていること、悩んでいることがあるなら、まずはノートに思っていることや、考えていることを書くのもいいと思う。書いてみることで、感情が整理されて、意外と悩んでいることなんてたいしたことじゃないと気づけたりする。

何よりも、私は悩んでいるときは、悩んでいるからこそ、勇気を出して誰かに相談してほしいと思う。一緒にいてくれる安心感、共感してくれる嬉しさ、これは、ネットやSNSでは得られないものだと思う。

だからもし少しでも辛い思いをしているなら、信頼している人に話してみたり、ノートなどに自分の思いを書いたりしてみてもいい。少しは絶対に楽になるから。

最後に「みんな幸せになりますように。」



# 「ごめん」より「ありがとう」

上富田中学校 三年 北川 智里

私は後向きに考えてしまうことが多く、去年から物事を前向きに考え、行動できるようになりたいと思っていた。そこで、直接つながるかは分からないが具体的に「ごめん」より「ありがとう」を自然に言えるようになるという目標を立てた。なぜこのような目標にしたかという点、私は人に何かしてもらったときに「ありがとう」という前に「ごめん」と言ってしまうことがよくあるからだ。何かをしてもらったときに使う「ごめん」という言葉の裏には悪いことをしてしまった自分を責める気持ちがある。例えば、テニス部の練習で私が飛ばしたボールを友達が取って来てくれたとき、どちらの言葉を使うのが良いのだろうか。今の私はボールを取って来てくれ

た友達への申し訳ない気持ちや自分のせいなのにという後向きな考えでつい「ごめん」と言ってしまう。謝るのも間違っていないと思うがまずは取って来てくれた友達に感謝の気持ちを伝えるべきだと思う。また、何かをしてくれた相手も「ごめん」と謝られるより「ありがとう」と言われる方が嬉しいと思う。このことから、私は「ごめん」は本当にふさわしい状況かを考え、意識して使い、「ありがとう」は自然に言えるようにしたい。

以前、先生が思っていることや考えていることは言葉に表れるという話をされていた。また、言葉にして言ったことは自分の気持ちに影響するということでもある。これは私も経験したことがある。クラブ中について「しんどいな。」とつぶやいてしまった。軽い気持ちで口に出した言葉が自分の気持ちをさらにしんどくさせた。もしかしたら周りの人までしんどい気持ちになっていたかもしれない。逆に考えると、前向きな言葉を使えば、自

分も周りの人も前向きな考えや気持ちになると思う。私の父は、「ご飯を食べ終わったときに必ず母に「ありがとう。美味しかったよ。」と言っている。意識しなければ気がつかないくらい自然に感謝の気持ちを伝えられる父を私はすごいと思う。父が感謝の言葉を言うことで、毎日の食事が良い雰囲気で終わっている。このように前向きな言葉は自分も周りの人も幸せな気持ちにすることができる。

これから私は、前向きな言葉をたくさん口にして考えや行動も前向きにしていきたい。もちろん、前向きならば何でも良いという訳ではなく、慎重さや謙虚さも必要だと思う。私は後向きな性格を直したいと思っているが見方を変えると後向きな考えの中には、慎重さや謙虚さが含まれていると思う。このように、自分の良いところである慎重さを大切にしながら、前向きな言葉や行動で周りを明るい雰囲気にすることができるようになりたい。

私は将来の夢がまだはつきりと決まっていないが、どのような仕事に就いても多くの人と関わっていくと思う。その時に、「ありがとう」や「頑張ろう」などの前向きな言葉で周りの人の力になれる大人になりたい。そのためには、今何をするべきかを自分で考えることが大切だと思う。まずは、「ごめん」より「ありがとう」を自然に言えるように心がけていきたい。



# 手話

中辺路中学校 三年 宮原 綾花

みなさんは手話を知っていますか。もし知っているなら手話は出来ますか。私が中一のとき福祉学習の授業で耳がきこえにくい方が学校に来てくださったことがありました。その授業があるまでは手話なんて興味をもつこと以前に関わることがありませんでした。私は多くの人に手話を知ってほしいと思っています。

まず、私が思う手話ではなくてインターネットで「手話とは」で検索してみました。すると、「耳や口の不自由な人が手を用いて表現する伝え方」とでてきました。では、私が思う「手話とは」は、自分の気持ちをより細かく相手に伝えるための方法です。みなさん、手話を使っている人同士の会話を一度見てみてください。普段、私たちが会話しているように、もしくは私たち以上に楽しく会話していませんか。私にはそう見えたのできこえ

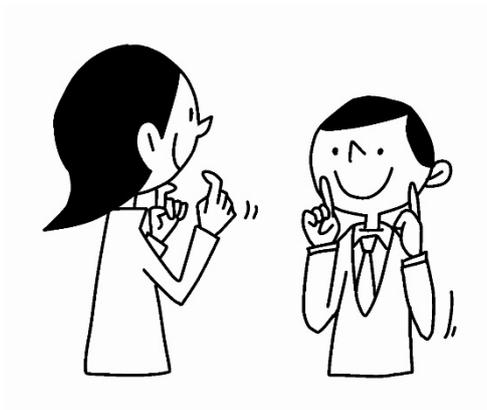
にくいから手話が使われているのではなくて気持ちを伝えたいと思うから手話を使っていると思いました。もし前者であれば筆談でいいと私は思いました。書くのは面倒くさいなどもあると思います。でも手話の方が伝わりやすいと思います。そのときの表情や手話の強弱で伝わり方は変わります。その点で手話はより細かく気持ちを伝えることができると思いました。

では、手話を使っている「耳や口に不自由がある」人とはどんな人なのでしょうか。調べてみると、一番に「聴覚障害」とでてきました。なので、それを詳しく調べてみました。すると「音をきく、または感じる経路になんらかの障害があり話し言葉や周囲の音がきこえなくなったり、ききづらくなったりする状態」とでてきました。聴覚障害の程度はデシベルという単位を用いて表し、数字が大きくなるほど聴力損失の度合が大きくなるそうです。その中でもきこえ方はさまざまで、補聴器や人工内耳を用いても明瞭にきこえるわけではないそうです。私はこのことを知って正直あまり想像ができませんで

した。でも極端に音がこの世界から無くなると思うと、とても怖いなと思いました。生まれてからずっと音がきこえづらい人もいます。急にきこえなくなる人もいます。私なら立ち直れない気がします。それでも踏ん張って立ち直るしかないし、その経験をした人がたくさんいると思うと、その人たちはとてもかつこよくてすごい人だと思います。

私はこのような人たちがいることをたくさんの人に知ってもらって少しでも多くコミュニケーションをとって手助けをしたいと思っています。私も手話はまだまだ知らないことの方が多くて勉強中ですがこれから頑張りたいと思います。私が最近覚えた手話は、「いちご」です。なぜなら夜ごはんにいちごがでてきたからです。いちごの手話は片手の親指と四指をつけて、その指先を鼻の頭に当てるとできます。私はこのように気になった単語を調べて覚えていきます。手話を学ぶことはとても楽しいし、それが少しでも誰かの不安によりそえるのだったらとてもいいなと思います。

私は、将来、たくさんの人と関われる仕事につきたいと思っています。そのときにきつと耳や口が不自由な方に会おうと思います。そんなときに笑顔で手に気持ちをそえてお話をしたいと思っています。私はこれからも手話の勉強を続けていきたいし、たくさんの人に手話の面白さや大切さを伝えていきたいと思っています。みなさんが思う「手話とは」はなんですか。



# 学校生活が楽しい理由

大塔中学校 三年 稲田 桜大

皆さんは学校が好きだろうか。自分は大好きだ。土・日曜日の二日間よりも学校にいる、月・金曜日の五日間の方が時の流れが速く感じるくらいだ。自分で言うのもなんだが、それくらい充実した学校生活を送れている。

NHK 放送文化研究所が昨年七月から八月にかけて十二〜十八歳の人を対象に行った調査で、九割近くは学校が「楽しい」と感じていることが分かった。中学生世代で「とても楽しい」と答えた割合は40.9%、「まあ楽しい」は49.5%であった。「楽しい！」には、色々な種類がある。例えば、「勉強で分かったことがたくさんあって楽しい！」や、「クラブ活動で今までできなかったことができるようになったから楽しい！」等々、まだまだたくさんある。調査では楽しい理由として、「友達と話したり、一緒に何かをしたりすること」を挙げた中高生は七割に上った。

自分は学校生活が楽しい。その理由は、主に三つある。

一つ目は、さっきも言ったが、勉強で今まで分からなかったところが分かるようになることだ。今までずっと解けなかった問題が、何回も何回も試行錯誤を繰り返して初めて解けた時の「スカッ」とする爽快感は忘れられない。

二つ目は、これもさっき言ったことだが、クラブ活動だ。自分は陸上部に所属している。入部当初は1kmが約五分だったが、今は、三分半くらいで走れるようになった。それでもまだまだ速くはないが、これだけ成長できたのは素直に嬉しいし、顧問の先生には感謝の気持ちを伝えたい。まだまだこれから上を目指して行きたい。

三つ目は、日々の生活だ。少し言い方が悪くなるが、友達とくだらないことを話して馬鹿みたいに笑い合ったり、休み時間にみんなが無邪気に遊んだり。まだまだ数え切れないほど思い出がでてくる。その思い出も、今思い返せば、忘れられない大切な思い出だ。

僕は現在、生徒会長をしている。

勉強や運動の楽しさをみんなと、わかちあっていくためには、なによりもみんなの関係が大切だと考える。学校のみんなが楽しく学校生活を送れるように僕は、「温言」を大切にしたいと考えている。「温言」は日本に古

くからある言葉で、優しくて情のこもった言葉。またそういう言葉を口に出すこと、という意味である。仲間の温かい言葉や行動を見つけ、それをクラスや学年、全校へと広げていく活動ができれば、楽しい学校になるのではないだろうか。

小学校の時に、クラスで人や物に対して優しくした人、優しい声をかけた人、見ていないところで頑張っている人などに、メッセージカードを渡す活動をしていた。自分は「困っていたとき助けてくれて、ありがとう」というカードをたくさん貰った。筆箱が落ちたときペンを拾う等、自分が何気なくしていたことが、友達にとっては、そんなに嬉しかったことなんだと知った。また、カードをたくさん貰うことで、自分も友達の良いところを探したりと人に対する見方が変わった。このカードを渡す活動を通して一人ひとりの言動にも様々な思いや、その人のよさがあることを知った。人には色々な良さがあり、自分が普段見ているのは、その人の一面に過ぎないと認識した上で人と接することが大切だと思った。

だから、自分自身がまず自分の身の回りに目を向け、一人ひとりの良さに気づける人になりたい。様々な出来事を、多面的に捉え、深く考え、行動する力を磨きたい。

そして、先生方も含め、全員がこの認識を持って、お互いを多面的に見ることで、もっともっと新たな仲間の良さの発見や自分の良さの発見につながるのではないかと考える。

生徒会では、これから「ありがとう運動」を行ってきたいと考えている。友達や先生に積極的に、「ありがとう」を言おうという活動だ。回数等を決めたりするわけではないが、「ありがとう」を意識して、しっかりと伝え合っていくことで、お互いが笑顔になれるような関係に近づいていくと考える。

このように様々な取り組みによって、大塔中学校を温かい学校にしたい。そして、自分だけではなくみんなが楽しくて行きたくなる学校にしたい。みんなが楽しめている姿を見て、さらにみんなが楽しくなれるはずだ。



# 温かな連鎖を増やしたい

上富田中学校 一年 梅本 剛志

あなたは、障害者の苦勞について考えたことはありませんか。僕は考えたことがありませんでした。今は手も足もあり、体を動かせて、目も見えてとても健康な生活を送ることができています。ですが、その苦勞を体験する大けがをしました。

去年の六月十八日、柔道の団体戦でぼくは投げられました。投げられた時、僕はいつもどおり投げられたつもりだったけど、左足の太もが今まで感じたことのないくらい痛くなりました。そして救急車で近くの病院に運ばれました。その病院でレントゲンをとると、病院の先生に、

「左足の太たい骨が折れているね。入院して手術しないといけないね。」

と言われました。そのときはとてもショックでした。ぼくは、大きな病院に入院しました。

三日後の六月二十二日に手術をしました。手術をした後は、何日もずっとベッドにいたので、じごくのような日々でした。重い障害を持っていて、ずっとねたきりの人は、こんな感じの生活を送っているのかなと、とても心が痛みました。

手術から一週間たった六月二十八日、リハビリが始まりました。最初はベットから車椅子に移動する練習をしました。その練習はとても難しく、一回移動するだけでも、長い時間と力を使います。車椅子にのって移動するのもとても力を使いしんどいです。そして何より、とても不便でした。階段は上がれないし、五〇メートルくらい進むだけで息切れします。とてもゆるやかな坂でも少ししか登れません。二センチメートルの段差をこえるのもとても力が必要で、三センチメートルの段差はこえられませんでした。車椅子を使うことで、たった一センチ

のちがいで苦勞することを知りました。足が不自由で車椅子を使って生活している人は、大変だなと思う中にごいという尊敬する気持ちもありました。病院に一ヶ月入院し、その後二ヶ月は車椅子で過ごしていました。

それからたくさんの人にお世話になりました。友達が、僕のかわりにプリントを提出してくれたことがとてもうれしかったことをおぼえています。ぼくの席は一番うしろだったので、教卓ととてもはなれています。骨折をしていなければ机をぬうように歩けますが、そのとき僕は車椅子でした。車椅子のはばは、想像以上に大きく、席の間を通れません。なので遠回りして教卓に行きます。そのとちゆうにある少しの段差をこえるのがとてもしんどかったので、プリントを提出してもらえることがとてもうれしかったです。

このように僕は骨折をして、足が不自由な人の立場になって半年という期間を過ごしました。たった半年ですが、ぼくにはとても長い期間に感じました。この半年の

期間にたくさんのことを学ぶことができました。ぼくたちは体も動く健康な人です。今現在でも世界には困っている人やつらい思いをしている人がたくさんいます。自分が少しつらい思いをしても、つらい思いをしているのはぼくだけじゃないんだ、と思いがらがんばってほしいです。障害者は、僕たちの考えないようなところで困っているようなことがあります。障害者だけでなく、人が困っているときは、まず相手の立場になり、何に困っているのか考え、できるだけ相手の困っていることを知ってほしいです。そして、できるだけたくさんの人を助けてあげてください。



# 一つのものだと考えて

田辺中学校 二年 坂倉 朱音

ある日、私の叔母さんは生まれたばかりの双子の子供を残して姿を消した。手紙には、「もう限界です。」と書かれていた。叔父さんが単身赴任中、一人で子育ての負担を抱えた結果、叔母さんは「産後うつ」になった。産後うつになった叔母さんは赤ちゃんを私達の家族に預け、しばらく離れて暮らすことになった。産後うつはお母さんだけでなく家族も悲しませると感じた。この出来事をきっかけに私は産後うつについて調べた。

「産後うつ」とは、分娩後の数週間、あるいは数カ月間、極度の悲しみを感じたり、普段行っていた活動への興味を喪失したりする状態のことである。現状、日本では母親の七人に一人が産後一ヶ月後にうつ病を発症していると言われている。また、父親の十人に一人が産後に

うつ病を発症しているというデータもある。産後うつがもたらす影響は計り知れない。例えば、母親の自殺。妊娠中から産後一年以内に自殺した事例は二年間で百二件に及ぶ。これは産後の死因として一番多いものになっている。また、近年問題視されている少子化にもつながっているといわれるのだ。その他にも母子関係への影響や虐待、経済損失など、産後うつは「うつ」そのものだけでなく、数多くの問題も引き起こす要因となっているのだ。

しかし、なぜ産後うつになるのか。厚生省の調査によると産後における周囲のサポート不足が大きな要因だと考えられる。私の住んでいる田辺市にはどんなサポートがあるのかも気になり調べてみた。保健師さんが家庭訪問に行く「こんにちは赤ちゃん事業」や、児童の預かりの支援を受けたい者と支援を行いたいものをつなげる「ファミリーサポート」など一才まで受けられる支援としては六十近くあることが分かった。

ここで不思議に思った方も多いと思う。なぜ六十近く  
のサポートがあるのにサポート不足を感じているのか。  
また、なぜ使えていないのか。私は知り合いのお母さん  
など三十人ほどに聞いてみた。するとサポートについて  
は知っていても知らない人に子供を預けることが不安  
だという声が一番多くでした。

私はこれを読み、「妊娠中から産後に頼る人を見つけ  
る」というものを行えばいいのではないかと思った。例  
えば、妊娠中の方を対象としたイベントでファミリーサ  
ポートの支援者さん呼び交流するなどがある。こうい  
ったものを行うことで、産後預けることへの不安を減ら  
していきたい。

妊娠中から産後に頼る人を見つけるといふ点でもう  
一つ気になる事がある。それは産前の支援は健康増進課  
が担当しているのに対し、産後は子育て推進課が担当し  
ているという点だ。課が違うことで困る事があるのでは  
ないかと気になった。先ほど例で出した妊娠中の方を対

象としたイベントにファミリーサポートの支援者さん  
を呼び交流するというものの場合で考える。すると、妊  
娠中の方を対象とするイベントは健康増進課の管轄内  
だ。しかし、ファミリーサポートの支援者さんは子育て  
推進課の管轄内のみでしかできないため、実際にこの例  
のものを行うのは難しい。つまり、管轄をまたぐ私の意  
見は実現しづらいものなのだ。

妊娠中から頼り先を作るといふのは産後、子育てをす  
るお母さんに「頼ってもいい」、「一人で頑張らなくても  
いい」という選択を与えるものとなるだろう。産前と産  
後、分けられがちなものだからこそ、一つのものだと思  
えて産後うつにならない対策を行っていきたい。



# 「当たり前前」の社会に

中芳養中学校 二年 下向 一颯

僕の父は、神社の宮司をしている。毎年お正月には、僕も神社のお手伝いをしているのだが、その時に参拝の方々にあいさつと、お話をさせていただく機会がある。ある時、車椅子に乗っている方が来られて

「この神社はスロープがあつて嬉しいよ。車椅子でも参拝しやすいから、毎年来てるんだ。」

というお話を聞き、僕はとても嬉しく思った。それと同じに、「僕は行きたい所に自分の足で行くことができるけど、障害のある方たちは行きたくても行けなかったり、行けたとしても目的を果たせず、あきらめなければいけなかったりすることも多いのではないか。」と思った。しかし、誰もが自由に行きたい所に行き、見たいものを見る権利があるはずだ。そして、「行きたい所に行けな

い。見たいものが見れない。」ということ自体が、「障害」なのではないか。そう考えると、障害のある方たちは、僕が思っている以上に楽しみや夢を奪われているのではないかと思った。だからこそ、僕自身も含め、一人一人が思いやりの気持ちや助け合いの心を持ち、ゆずり合い協力していく意識を常に心に留めながら、変わつていかなければいけない。また、社会が変わらなければ意味がない。そう、何より、社会を変えていくことが大切なのだ。

では、今、日本ではどんな取り組みをしているのだろうか。そう思い、インターネットで調べてみると、国内では今、「個人モデルから、社会モデル」に変化してきているそうだ。「個人モデル」とは、「障害は個人にあるのであつて、その個人側の工夫や努力、治療などによって解決するべきものである」という考え方であり、それに対して「社会モデル」とは、「障害は社会の側にあるのであつて、社会側の工夫や努力、改革などによって解

決するべきものである」という考え方だそうだ。

でも、そんな風に、社会はみんなが快適に過ごしやすいものになっていえるだろうか。

公共機関や通路、建物などの利用時に不便なことはいだろうか。

飲食店の入店や、就職や試験などは希望通りに受けさせてもらえているだろうか。

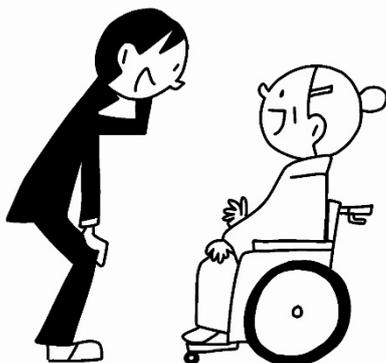
必要な情報は得られているだろうか。

また、悲しいことに、未だに障害のある方々に強い偏見が根付いている人たちもおり、傷ついている方がいるのも事実で、今後そういう問題をどう解決していくのかも課題になるだろう。

しかし、そうは言っても、昔と比べると今は、差別をなくす運動が多くなったり、法律、制度が整ってきたりと、いい方向に進んでもきている。このまま、差別のない社会にするには、僕たち一人一人の力が必要だ。

僕は、この作文の始めに、

「この神社はスロープがあつて嬉しいよ。」と書いてくれたことに、「とても嬉しく思った。」と書いたが、そういうことが「嬉しい」と思うのではなく、「当たり前」の社会になればいいなと思った。



# 僕らの世界

大塔中学校 一年 赤木 千愛

私は、和歌山に住んでいる。生まれも育ちも和歌山だ。日本の中では、「田舎」と呼ばれてしまう和歌山。東京と比べればそう呼ばれることも頷ける。私が生まれたのは南部。そこから、田辺に引っ越してきて、今は中学生として過ごしている。私達の地域は和歌山の中でも、和歌山市ほど、ビルは立ち並んでいるわけではなく、山ばかりといったところだ。都会に憧れたことは両手で数えきれなくらいある。テレビやインターネットで都会を見る度、近くにショッピングモールがあればな、電車を使用时なくてもいろんなお店にいたらな、なんて思う事もあった。遠出しなないと買い物も自由にできないし、乗るバスや電車の計画を立てるのもひと苦労だ。おまけに夏の夜の虫も、虫が苦手な私には風情があるとは感じられない。

さて、ここまで田舎の残念なところを淡々と挙げたが、逆に田舎の良いところとはなんだろうか。電車が混雑し

ていないこと、駐車場が多いこと、人ごみが少ないことだろうか。それとも、地域とのつながりが多いことだろうか。ここまで考えたが、やはり正直、建物等は都会の方を羨んでいる節がある。

しかし、それでも田舎にもよいところはあると思っっている。ビルや店が立ち並んだ都会。そこに緑はあるのだろうか。安全はあるのだろうか。都会に行き上を見上げるとビルの高さに圧倒される。でも田舎で上を見上げるとそこには緑が沢山ある。二酸化炭素を吸い、酸素を出している葉っぱ。人間は何のお陰で呼吸できているか。それに、海は空の色を映していると聞いたことがあるだろうか。田舎の海は水色で、都会の海は黒寄りの紺色だ。そして、田舎は広大な自然に囲まれていて、空気がとても綺麗だ。

これまで、都会と田舎について、淡々と考えてを述べてきたが、私が言いたいののは、実は田舎が大好きで、自然を残してほしいということだ。よく自然を取り壊して工業地帯を作ろうという話を聞いたことがあるだろう。経済的にも豊かになれるかもしれない。が、そうした地域では、段々と緑が減って行きつつあるのが現状だ。その内、山も削られてしまうかもしれない。だからこそ、

私は自然を大切にしたいと思う。まだ、ショッピングモール等に憧れてはいるが、大切な自然を削ってまで欲しいとは思わない。工業等に専念する地域も経済的には必要なかもしれない。でも、自然がなくなった日本で苦しそうに、不満を抱えている人々を見たくはない。自然は安らぎをくれるだろう。先が見えないこの時代で、よりよい世界を創る為にはどうしたら良いのだろうか。不便さはどこにでもあり、不満ばかり言っても仕方がない。それなら、呼吸や安心、健康・健やかな暮らしのために、必要な自然を残しておき、これ以上空気を汚さず、次世代に世界を繋いでいきたい。

私は自分の地域について考えている。どうすれば、大塔や田辺の自然を残していけるのだろうか。例えば、私は以前両親に誘われて「GOMIスポ」というイベントに参加したことがある。「GOMIスポ」とは、ゴミ拾いをスポーツとして競うイベントだ。ゴミの種類や数で、それぞれ得点が付与される。ゴミ拾いで環境を支えられるし、ゲーム感覚で楽しむこともできる素晴らしいイベントだ。実際家族と参加したところとても楽しかった。同時に気づいたのは、意外とゴミが落ちていなかったことだ。人が沢山通るようなところにも行ったが、それほ

ど大きなゴミはなかった。それらのことから、私達の地域の田辺はゴミ拾いといった環境の為になることが普段からできていないのかと気づいた。もしかしたら、ポイ捨てをする人も少なく、マナーが守られているのかもしれない。それでも、ゴミが全くないというわけではないし、みんなでやると、全員でおよそ四〇袋。一気にキレイになった。みんなでやったら、地球を守るんじゃないか。美しい町をさらに美しくしていきたい。これからもそうした取り組みは大切にしていく。大好きな地域を地球環境に優しい活動で守っていきたい。みんなも自分の地域を大切にしてほしい。



# 匿名性の排除

上富田中学校 三年 芝 緋呂

いつからだろう。本当の自分を隠すようになったのは。

物心が付いたときから周りの顔色を伺っていたと思う。

よく記憶に残っている言葉は、

「仕事で忙しいから、また今度ね。」

そう言われると反抗できなかった。シングルマザーの母を困らせたくないという思いがそのときから強かったのか、はたまた、母から怒られたくないなどの強迫観念に淘汰されていたかのどちらかだろう。いずれにせよ、今の自分には分からない。遠い昔のことなのだから。

気がつけば自分は、リボン結びや自転車の乗り方も、ろくに親から教わらないまま大きくなってしまった。昔からの、周りの顔を伺う癖は今でも健在で、友人関係における間柄では自ら進んで気を使ってしまうことが多々ある。空

気を読むことは良いことだ。そう思う反面、本当の自分を隠していいものだろうか。そういう疑問が心の中で現れては消える。

一つネットで知ったことがある。精神医学用語で「ペルソナ」という物をご存知だろうか。簡単に説明すれば、自らの外的側面を指す言葉で、人と接するときにしても、友達と接するとき、親と接するとき、社会と接するときで態度や行動が違ってくことを意味していて、どんな人と接するかで自分が無意識に使っている人格のことである。ペルソナを使いわけるのが、今の社会の一般常識なのだと自分は考える。なぜなら、普通、家族に学校の先生や会社の上司のように接することはまず無いだろう。逆もまた然り。しかし、自分はペルソナを使う上で一つ感じたことがある。本当の自分を見失う危険性だ。友達と話するときの人格、親と話するときの人格、その他の人格、自分が持っている人格の全てに共通することがある。それは、人から嫌わあることに對する恐怖心だ。これは、人格の垣根を超え

て存在し続ける感情でいつもこれだけは忘れることができない。

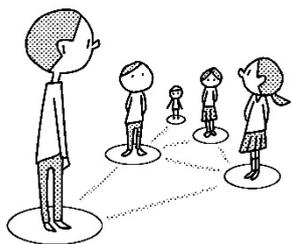
昔からの出来事の影響だろうか、それとも今までの経験の中で「人から嫌われることを恐れた方が良い」と体が勝手に認識したのかは分からないが、人から嫌われることを必要以上に意識してしまう。この感情が故に本当の自分を隠してしまっている。その節はあると思う。その自分を隠すという行為が自分を見失うことにつながっていることも知らずに。

自分を守るように行動すればする程、自分を見失うようになる。個人的には、これに合点がいかない。なぜ、自分を守るたびに生きづらくならなければならない。なぜ社会では素の自分を出してはいけないのか。なぜ、子の成長を願う母が子に苦しい思いをさせなければならないのか。

この大きな問題は何によって引き起こされているのか。そう、ペルソナだ。この社会に適応するために培った能力は、余りにも人間には使いこなせる代物では無かった。

なら、この現状を改善するにはどうすればいいか。自分の答えは、このペルソナ社会から人間が脱却すればよいのだと思う。仮初の人格だとか、匿名性を排除すれば人間は自身の発言に責任を持つことができる。ただし、人間が自身を見繕わなくなることと言論や思想による激突は避けられない問題になるだろう。しかし、人間には、「議論」をする脳と口がある。争いを丸くおさめるのが人間らしい解決の糸口だと自分は思う。

少し話が飛躍したが、自分は結論としてこれを述べたい。言いたいことは進んで言うべきだと。過去の自分のように後悔する人を少しでも減らしたいと自分は思っている。そして、何よりも、心の底から笑い合える世の中になって欲しいと自分はただ願う。



# 出店体験で得たもの

白浜中学校 三年 小森 寛太

僕は、昨年の冬休みに、「営業の大変さ」や「人と協力することの難しさ」を感じました。そう感じたきつかけは、白浜の商工会青年部の方々が「白中の店をつくってみませんか。」と提案してくれたことです。

その白中の店とは、白浜町のイベントである商工祭で出店するということでした。僕はその「開業チャレンジ」という取り組みに興味を持ち、参加することにしました。この取り組みには、白浜中学校の一、二年生約四十人が参加し、僕は副社長になりました。商工祭への出店に向けての会議が開かれ、そこで「運営」「マーケティング」「営業」という三つの役割に分かれました。「運営」とは、出店するときに、内装を決めたり、備品を調達したりする役割、「マーケティング」は、店の宣伝のためのポスタ

ー・チラシ作りなどをする役割、「営業」は、店を出す料理の企画・試作、本番での調理などをする役割です。僕は副社長なので、運営とマーケティングをまとめて担当していました。僕が運営とマーケティングを担当して大変だったと感じたことは、次の二つです。

一つ目は、たくさん意見をまとめて答えを一つにすることです。出店する店をよりよくするために、たくさんの意見を出し合いますが、意見を一つにまとめるためには、ほかの意見を諦めないといけないこともあります。中には、意見を強く推してくれていても、その意見を諦めなければいけないということもありました。

二つ目は、自分以外の人達にきちんと仕事をしてもらうことです。会議をしているときに隣にいる人と話したり、遊んだりしている人がいたので注意をしたことがありました。しかし、注意をしても十分後くらいにまた遊んでいるなど、人に集中して取り組んでもらうことがこんなに大変なのかと感じました。一方、熱心に協力し

てくれる人もいて、なんとか本番までに準備ができました。

本番の日、開店の二時間前に全員集合し、調理班と接客班に分かれ、調理班は米の準備や野菜の準備、接客班は、接客方法の再確認とシフトの確認を行いました。開店当日でも、大変だと感じたことが二つありました。

一つ目は、準備不足です。材料を確認したはずなのに、足りないものが続出し、本番中に何度も買い出しに行きました。確認不足だったために、いろいろなものが足りなくなってしまったのです。

二つ目は、任せた仕事をきちんとしない人がいたことです。仕事中にどこかに行ってしまう人がいたので、残った人の仕事量が増え、カバーするのが大変でした。

僕はこの体験を通じて、「営業の大変さ」や「人と協力することの大変さ」を知りました。「営業の大変さ」では、事前にどんなことが必要なかを考え、準備をすることの大切さを知り、「人と協力することの大変さ」では、多

くの人と一つの仕事をするときには、自分の思い通りに人が動いてくれるとは限らないことを知りました。

将来どんな職業についても、人と関わりながら働くこととなります。今回の商工祭での出店体験で気づいたことは、僕の将来の糧になるはずで、これからも、このような体験をたくさんし、見聞を広げていきたいと思えます。



# マイヒーロー

高雄中学校 二年 中嶋 那悠

私はある習い事をしています。私はある習い事がとても大好きで、していると楽しくて幸せです。ですが数年前に辛いことがありました。とても仲が良かったチームメイト二人に仲間はずれにされたのです。その二人のことはとても信頼していたし、長い付き合いがあったので、私はとても落ちこみました。ショックで夜もねむれない時もありました。それから習い事をやめようかと考えましたが、コーチやリーダーに、「今上手くなつていつているからやめないで。」と言われてました。そしてもう一度自分で考えなおして、この習い事をやめたら自分の生きがいがなくなってしまうと感じ、続けることを決意しました。それからしばらく辛い思いをしながらもお母さんと通い続けました。半年後、イベントでお母さん

が受け付けをしないといけなくなり、私が一人になってしまうのである先輩に声をかけました。その先輩は前にも心配して声をかけてくれた先輩です。

すると先輩が

「ちょうど声をかけようと思っていたところだったよ。」  
と言ってくれて、いっしょにいてくれることになりました。その日からずっと練習の時も先輩とその友達がいっしょにいてくれました。先輩はよく周りが見えていて、いつも気にかけてくれます。半年間、時間が空いていたのは先輩が受験で習い事を休んでいたからです。それでも、たまに連絡をとりあって優しい言葉をかけてくれて、私はとても安心することができました。そして、今はいっしょにチームを組むことができている、とても頼りがいがあります。また、習い事もとても上手でみんなから頼られています。体調が悪かった時も気にかけてくれたし、いつも助けてもらってばかりです。その先輩は私だけでなく、他の子も助けられるすごい先輩です。誰かが困っていたら、す

ぐに行動に移せていて、本当に尊敬しています。技術面においても、性格面においても、すべてが私のあこがれです。そんなあこがれの先輩に一步でも近づけるように、私ができることを考えたいです。まず、技術の向上をさせるためにはどうすればよいか。一、自主練習にはげむ。ストレッチや筋トレ、ダンスの練習など少しでも良いから練習する。二、全体練習の時に全力を尽くす。分からないことがあればすぐに聞く。アドバイスをもらう。意見を出す。実際にやってみる、等々できることはすべてするようにしたいです。次に、人のために行動できるようにするためにはどうすればよいか。一、相手の変化に気づくようにする。しんどそうにしているのなら、ときどき様子をうかがうようにする。二、相手にベストはどれかを問う。相手にとってのベストを尽くすために協力する。三、相手にあわせる。相手がしんどくならないようにあわせてあげる。これらの行動をすすんでしてみるようにしたいです。

辛い思いをしたことや素晴らしい先輩に出会って学んだこと

は、

「世界は広い。人にひどいことをしてくる人と無理矢理いっしょにいらなくても、自分にあう人がきつと見つかる。一人じゃない。助けてくれる味方がいる。一人でかかえこまなくていい。誰かを頼っていい。」

このようにこの世界には素晴らしい人がいると気がつけました。私にとって先輩は心の恩人であり、尊敬しているあこがれの人です。先輩がいなかったら今の私はいなかったです。先輩が今の私をつくってくれました。

そんな先輩のようになれるように努力したいです。私が助けてもらったように、私も誰かを助けられるようになるために、私はその目標に向かって進んでいきます。



# 批判的な世の中に対する批判

田辺中学校 三年 古久保 瑛留

皆さんはマリリーナ・アブラモヴィッチをご存じだろうか。ユーゴスラビア出身のパフォーマンスアーティストだ。よほど芸術に関心があれば、知らないだろう。私は、芸術に特に関心があるわけではないが、ある日、何気なく、ユーチューブを観ていた。すると芸術系のユーチューバーが動画で彼女のことを紹介していて彼女のことを知った。私は彼女のことが気になり、インターネットで彼女のことを調べてみた。そして、またユーチューブに戻った。それから幾日も経ったある日、友人と話していたとき、私は彼女の話しようと思い、あまり博識ではない友人に彼女の説明をし始めた。すると友人は「マリリーナ・アブラモヴィッチか、知ってる。知ってる。」

と言ってきた。私は驚くとともに、なぜ知っているのかと思った。わけを聞くと私と同じく、ユーチューブで動画を観たと言う。私はそこでユーチューブの、人々の教養を豊かにしてくれるという側面を見た。ユーチューブなどのSNSは、今、いわゆる評論家やエッセイストと呼ばれる人々の、批判的になっていっているような気がする。これらの人々の批判はスマホへの依存や、幅広い知識が身につかないということに重点を置いていると思う。しかしそれは本当に悪なのだろうか。もう少し考えてみると、専門的な知識がつくという良い点もあると思う。けれども、SNSへの批評は先ほどのような批判的なものばかりであるように思う。

これはユーチューブなどのSNSへの批評に限った話ではない。世の中には、批判的な意見が多すぎると思う。政治への批判、新しいテクノロジーへの批判、テレビへの批判、芸能人への批判、そして批判を行う人への

批判などである。しかし、世の中には、それほどまでに批判することがあるのだろうかと思う。もちろん批判は、社会の発展には必要不可欠なことに違いない。けれども、低品質な批判はときに、社会の質を下げてしまうと思う。

例えば、ある政治家のスキヤンダルが発覚したとしよう。もちろん世の中の人々は批判するに違いない。それにより、政治家が辞任にまで追い込まれることもあるだろう。また、どれだけ良い政治を行っていても、これにより辞任してしまうこともあるだろう。それにより、人気はあるけれど、政治があまりできない人が代わりをすることもあるだろう。このスキヤンダルへの批判は結果的には政治の質を下げることにつながるのではないか。つまり、有害な批判なのである。

このような有害な批判が世の中には、多すぎるように感じる。有害な批判はまず、無知のもとになり立っているのである。問題の本質をつかまずにこの世の全ての問

題を批判してしまうことにより、世の中の有害な批判が増えていくのである。

有害な批判を減らすために私は、もっと楽観的な考えを持つべきだと思う。先ほどの政治家のスキヤンダルを例に考えてみると、すぐに批判するのではなく、これは政治には関係がないと楽観的にとらえることにより、有害な批判を生まずにすむ。

このように楽観的な考えを持ち有害な批判を増やさないことが今の世の中で社会が発展するために必要なことではないだろうか。



# 私の学校、世間の学校

三舞中学校 二年 岡田 莉空

私は、全校生徒が片手で数えられるような山奥の中学校に通っている。校舎は小学校と合同で、その小学校の児童数も十人程でとても少ない。私はこのことに引け目を感じていた。

まず、欠点として真っ先にあげられるのが人の少なさだ。知り合いに自分の学校の生徒数を言うと必ずと言っていいほど、

「少な！」

と返される。数が少ないのは事実で、相手も軽い気持ちで言ったのだろうが何回も言われてきたため、正直またかと面倒くさく感じる。

そして、あくまで個人的な意見になるが、小規模校はコミュニケーション能力を育むことが難しい。例外もい

るが、全員が幼馴染かつ、少人数のためいろいろな人と話をする機会がなく、人見知りということもあるのだろうが、実際に話すとしどろもどろになってしまうことが多い。その点、大規模校はいろいろなタイプの人と会話できて良いだろう。

そして、意見の対立というものが極端に少ない。人が少ないため意見そのものが少なく、しかも大体意見を言う人が決まっており、その人が意見を出したら賛成、という形ですぐに話し合いが終わってしまう。とは言っても意見を出すまでの時間が長いいため教室には長い沈黙が流れ、それで時間がつぶれてしまい、積極的な意見の交流が望めない。

しかし、引け目を感じている、というだけで学校が嫌いというわけではない。逆に私は自分の学校が好きだ。そのため、小規模校にデメリットがあるのならば、大規模校にも多少なりともデメリットがあるはずだ。絶対に見つけて見せる、と謎の決意を固めた私は早速大規模校

にもあるはずのデメリットについて考え始めた。

第一に、人が多いため窮屈そうだ。これは私が実際に思ったことなのだが、小学生のころ他の学校との交流で、自分たちの学校と比較するとかかなり人数の多い学校に行っていたのだが、教室に行くと、所狭しと机と机とすが並べられていた。これが当たり前なのだろうが、小規模校に通っている私からすると窮屈に感じたのを覚えている。

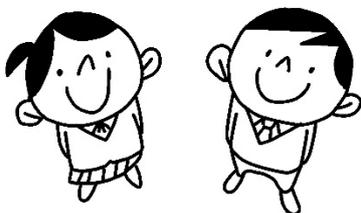
二つ目に、一人ひとりに目が行き届かないということだ。たとえ何か悩んでいたとしても主張が弱い子であれば悩みを打ち明けられぬままクラスで埋もれていつてしまうだろう。もしその悩みがはじめとしたら学校側は重い責任を負うことになり、いじめを受けた子もまた一人心の傷と共に生きていくことになる。小規模校は何と言っても人が少なく、一人ひとりに目が行き届くため、幾分かマシだろう。しかし、いざトラブルが起きた場合、逃げ場がないのが難点だ。

このように、小規模校と大規模校、どちらにもメリッ

ト、デメリットが存在する。人が多かろうが少なかろうが、習う内容は同じで人数で優劣がつくわけもない。また、これからもまだ高校、大学という道がある。高校からどうせ人が増えるのだから、小規模校、大規模校と討論する必要はない。そうだ、人はすぐに白黒はつきりさせようとするが、そんな必要はないのだ。

これからの時代、互いの長所と短所を認め合い、尊重して生きていくことが大切になってくる、私は物事に何でも白黒をつけるのではなく、長所と短所を理解したうえで、きちんと向き合える格好いい人間になりたい。

私は、自分が通っている学校を誇りに思い、残り一年と半年、堂々と胸を張って、友達や先生たちと共に青春を謳歌したい。



## 人類の過ちと自分たちができること

大塔中学校 二年 愛瀬 琉大朗

生態系を崩してしまっている生物はなんだと思いますか。

ほとんどの人はこう答えるでしょう「外来種」だと。確かに、多くの在来種が、外来種によって苦しめられています。しかし、僕が思う生態系を崩す一番の生物は「人間」です。自分達の繁栄のために生物を減らし、住処を奪い、さらに外来種を持ち込むなどの悪影響があることを繰り返しています。

まず、一つ目の「人間が生物を減らしていること」についてですが、自然の環境の変化の影響以外にも、大昔から何種類も生物が絶滅に追いやられています。かつては、ニホンオオカミがいましたが、現在では乱獲や駆除により絶滅しています。現在でも、アフリカ象、アジア象、ジンベイザメ等が、密猟により、絶滅が危惧されています。どれだけ頑張っても、密猟者が狩る分、生物の数は減ってしまっています。また直接的ではなくても、畏に引つかかる、人が捨てたゴミを食べる、自然に有害なものを排出するなどで死に至ることがあり

ます。これらの死亡原因をどれだけ減らせるかが生物を増やすことにつながるのではないのでしょうか。

次に、二つ目の「人間が住処を奪っていること」についてですが、今は土地の開発や森林の伐採が進んできています。自然環境がどんどん破壊されています。これらは住処を奪っているといえるでしょう。みなさん、一度、生き物の立場になって想像してみてください。自分たちの町が、何らかの生物がすむ場所の確保や、行動範囲を増やすために壊され、侵略されていく。これはとても苦しいことです。しかし、これは生き物が現在人間にされていることなのです。環境への配慮が欠けてしまっている行動が多くあります。人間は、現時点でも十分に発展していると思います。だから、これからどれだけ自然破壊をせず、今の状態を保つことが大切になってくるのではないのでしょうか。

さらに、三つ目の「人間が外来種を持ち込んでいること」ですが、これは紹介した三つの中で一番人間が悪いと思えます。なぜなら、一つ目の「生物を減らしてしまう」というのは、自然環境の変化や、気候等の影響で強者が何らかの理由で増え、弱者が捕食等され減少していく、これは人間がいなくても自然で発生する可能性があります。また、二つ目の「住処を奪

う」ですが、これも何らかの理由で自然災害や地形の変化があり、住処がなくなるということもあり得ます。人間以外の影響で起こる可能性があります。

しかし、三つ目の「外来種を持ち込む」は全てに人間が関わっていると言えるでしょう。生態系を直接的に、改変してしまふ。大きな影響を与えてしまふ行為です。なぜなら、生物たちは、進化を遂げずに急激に、ほかの地域へと侵入するといったことはできないからです。例えば、米国から日本にブラックスバスが人間なしでどう来るか。それは、海水に適応しなければなりません。しかし、現在の米国のブラックスバスはどうでしょうか。全く進化しておりません。このように、遠く離れた地域の種が、移動することは進化を遂げることが条件であるはずなのに、人間が運ぶと、進化する必要なく、ほかの地域へ侵入できてしまいます。これによって、一部の在来種は自然ではあり得ない打撃、非常に大きな影響を受けています。そして同時に移動した生物も外来種として駆除をされる等、尊い命が奪われていきます。これは、在来種を守る仕方のないことなのかもしれません。でも、勝手に連れてこられ、生きるために環境に適応しただけで害悪扱いされるのはとても理不尽なことです。人間は、生物への扱いを変えていかなければ

ばなりません。

紹介した三つは人間がしてしまったことに違いありません。過去を取り戻すことはできないので、これからこの世界全体で取り組んでいく必要があります。人間がしてきたことは、人間でしか取り返せないと思えます。

こうした自然を守ることに関連して、僕たち学校では、水辺の楽校プロジェクトという取り組みを行っています。水辺の公園をさらに活用し、環境を保全していくための活動です。水辺の公園の活用や保護を中学生で考えています。昨年度は、大塔行政局でプレゼンテーションを行い、ゴミ拾いや、池の掃除、メダカの保護に取り組む計画を提案しました。本年度より、外来生物の調査等を実行していく予定です。自分たちのできる範囲から、活動に取り組み、元々あった美しい自然を取り戻したいと考えています。すべての生き物が心地よく暮らせる、未来をつくりあげていきたいです。



# 関わることで

高雄中学校 二年 杉原 日葵

私が中学校に入って、まず思ったことは、「小学校に戻りたい」ということでした。

入学式の日、私は、緊張でバクバクしながら着慣れない制服に腕を通しました。でも、緊張を上回るくらい、中学校生活に対する楽しみや期待がありました。

入学式が終わり、新しい教室と新しいクラスメイトに囲まれて、また、楽しみと期待が高まっていくのを感じました。

授業が本格的に始まって、この子はこんな子なのだとだいたい分かるようになってきました。ムードメーカーな子がおもしろくて笑ったり、部活動を友達といっしょに選んだり、楽しいことがたくさんありました。

でも、部活動も楽しいことばかりではなく、気の合わ

ない子だって、もちろんいました。

そしてそのうち、小学六年生の頃の楽しかった日々や中学校で離れた友達を思い出すようになりました。思い出す度に、戻りたいという気持ちが増して、つらくなりました。そして、毎日のように、

「小六に戻れたらいいのに。」

と小学校からの友達にこぼすようになりました。友達は、いつもうなずきながら共感してくれました。でも、友達から「戻りたい」と言い出したことは、一度もありませんでした。友達は、今を見れていたんです。私は、それができずに、ずっと、戻りたい、戻りたいと絶対に戻れないあの頃を羨んでいました。私は、自分で自分の中学校生活をつまらないものにしていました。そのことに気づいてから、クラスメイトの良いところがたくさん見えてくるようになりました。

そんな時に迎えた体育大会。私たちは、大縄跳びが苦手な手で、練習では、いつもビリでした。私は大縄を回す役

でみんなが一回でも多く跳べるように、もう一人の大縄を回してくれる友達と息を合わせて、がんばりました。みんなもいつもの練習の時よりも、声を出して数えていて、クラスの団結力、真剣さが肌で感じられました。けれども、結果はビリでした。でも、私たちは練習のときに一度も超えることができなかった二十回という壁を超えることができました。私もクラスのみんなも、達成感と喜びに満ちていました。

私は、「自分の中学校生活、自分で楽しいものにしなきゃもつたいたい」、こんなポジティブな考え方を、体育大会を通して、考えられるようになりました。

それから、文化発表会や校外学習など、様々な行事を共にして、このクラスが大好きになっていきました。日々の授業やそれこそ十分休けいの時間でも、楽しくて、このクラスに入れたのがうれしくて、たまらなくなりました。

一学期の私は、小学校六年生の時の方が楽しかったと、

勝手に絶望していました。でも、関わることで、みんなを知ること、これ程まで、自分の世界が変わるとは、思っていませんでした。クラスの一員として認めてもらって、頼ってもらえて、この一年間本当に良いものだったと心から言えます。

今年からは、私も先輩です。入ってくる後輩たちに、高雄中学校の良さと、人と関わる事の楽しさ、大切さを伝えていきたいと思います。そしてなによりも、中学校生活という貴重な時間を、全力で楽しんでもらいたいと思います。私も、残りの中学校生活を全力で楽しみながら、成長していきたいと思っています。



## 将来の夢と大切にしていきたいこと

東陽中学校 一年 山本 将真

僕には、将来の夢がある。それは「プロバスケットボール選手」だ。

なぜプロバスケットボール選手になりたいのか、それにはある理由ときっかけがある。僕は、バスケットをしている。そして、兄と姉もバスケットをしている。そのため僕は、小さい頃から兄や姉の試合について行ったり、家で家族がバスケットのことに話しているのを聞いたりしていた。だから僕の身近なところにはいつも「バスケット」があったのだ。

バスケットが身近にあった僕は、当然、その頃からバスケットに興味があり、「やってみよう」と思うようになっていた。

そして、小学校入学と同時に、クラブチームに入ってバスケットを始めることにした。その日から僕は、見る楽しさだけで

なく、やる楽しさにも気づき、バスケットがまた一段と好きになった。

こうしてスタートした僕のバスケット人生。この時は将来の夢を聞かれると、迷わず「バスケットボール選手。」と答えていたほど、バスケットが好きでたまらなかった。

しかし、小学校高学年ぐらいになると、チームメイトとの関係がうまくいかなかったり、シュートが入らなくなったりして、バスケットのことで悩む時期があった。その頃の僕はバスケットを心の底から好きだと思えず、将来の夢も迷わずに言えなくなってしまうていた。

そんな時、僕を一番近くで支えてくれたのが「家族」だ。特に兄と姉はバスケットの良い見本だった。バスケットのことで質問をしたら教えてくれたし、ビデオに残っている兄と姉のプレーは、すごく参考になった。

そんな兄と姉、家族に僕は、「プロバスケットボール選手になって恩返ししたい。」という思いがある。これが、プロバス

ケットボール選手を目指す理由だ。

そして、プロバスケットボール選手になりたいと思うようになったきっかけは、ワールドカップでの河村勇輝選手の活躍だ。

河村勇輝選手は、バスケット日本代表のポイントガードでチームの司令塔だ。日本のプロリーグでも、大活躍中の選手である。そんな河村選手のプレーで、特に印象に残っているのはワールドカップのフィンランド戦での出来事だ。日本は最大十八点差をつけられてしまった。家族で観戦していた僕も正直、「もう負けやな。」と思った。しかし、そこから河村選手が大活躍して、点差をひっくり返し、日本はフィンランドに勝利したのだ。

河村選手は、この勝利の立役者だったと思う。そしてこの活躍に僕は、勇気と感動をもらった。また、あきらめないことの大切さを知った。だから僕も「これからはどんな時でもあきらめないようにしよう。」そして「周りの人に夢と感動を

届けられる選手になりたい。」と思った。

プロバスケットボール選手になるのは、すごく難しいことだと思う。しかし、目標は高い方が良いと思うし、そのために体づくりや練習など、「努力」は欠かさないつもりだ。そして、これからバスケットをしていく上で、人との関わりは外せないし、たくさんの人にお世話になったり、迷惑をかけてしまったりすると思う。だから僕はこれから、普段の生活でも、感謝の気持ちを伝えたり、表直に謝ったりすることを大切にしていこうと思う。



# 自分らしく生きる

中芳養中学校 二年 松浦 千春

私は、障がいの有無で差別されてしまう社会があることを許せません。みんな、望まれて生まれてきたはずですから。それなのになぜ、障がいの有無で差別される人がたくさんいるのでしょうか。

私は、障がいの一つの個性だと思っています。障がいのある方も、ない方も、みんな同じように個性を持っています。その個性を批判するのでは無く、認め合うということが大切だと私は思います。絵が上手な人、字がきれいな人、運動ができる人、この世界には、たくさんの方がいます。でも、同じ人なんて一人もいません。一人一人がちがう人間であり、人権を持っているということを覚えておいてほしいと思います。

みなさんは、「みんなちがって、みんないい」という言葉を知っていますか。この言葉は、金子みすずさんの代表作、

「私と小鳥と鈴と」という詩の一文です。私はこの言葉に救われました。みんなちがって、みんないい。この言葉は、一人一人、ちがう人間であって、それぞれのいいところがある、ということを教えてくれました。自分を認めてあげることができれば、少しはこの世界が生きやすい世界になると思います。自分を認める、これは、言葉で言う分には簡単ですが、なかなか、実際に出来ている人はとても少なくて感じます。

人は、百個の良いところより、一個の悪いところばかりを気にしてしまいがちです。悪いところばかりを気にしてしまうことによって、心身への負担がかかってしまいます。そうになると、自分を認める、ということはとても難しくなります。なので、まずは自分の良いところを見つける、これを心がけてみると良いのではないかなと思います。

私は、自分を認めるということで、大切だと思うことがあります。それは、人からほめてもらったことを、素直に喜んで否定しないということです。そうすることで、自分はもちろん、相手もうれしくなるのではないかな、と思います。ほめられると、はずかしくて否定してしまいがちですが、そうしてしまうと、自分も相手もうれしい気持ち

にはならないと思います。なので、ほめられたら、素直に、  
ありがとう、などの言葉を返すようにしてみるといいので  
はないかと思えます。

私は、自分の人生を自分らしく生きたいです。だれかの  
言いなりになる人生は、嫌です。自分らしく、他人の目や  
周りからの意見に流されずに生きるのはとても難しいこ  
とだと私は思います。でも、自分の人生です。たった一度  
きりの人生を楽しまないと損だと考えると、やっぱり自分  
らしく生きる、ということとは、とても大切なのかなと思っ  
ます。自分らしく生きるために私はまず、困っている人が  
いたら声をかける、ということを意識して生きようと思っ  
ています。人の目を気にせずに、自分らしい行動ができる  
人になりたいです。

私は、障がいのある方もない方も、一緒に楽しめる社会  
を作りたいです。一人一人が、「自分らしく生きる」という  
目標をかかげ、みんなが助け合って生きられる社会があれ  
ばたくさんの人々が救われると私は思います。

今まで、障がいの有無で差別されている人々をニュース  
やネット記事でよく見かけていて、この人たちが救われる  
社会になってほしいと思っていました。でも、思っている

だけじゃ、みんなが救われる社会は、作れないと思います。  
まず、自分が行動しないと、社会はなにも変わりません。  
なので、まずは、私がみなさんに伝えようと思いました。

みなさんも、差別問題について、インターネット上など  
で、見たことがあるのではないのでしょうか。見たことがあ  
っても、考えないでスルーしてしまう人も多くいると思っ  
ます。でも、一度考えてみてください。もし、自分が差別  
されてしまったら悲しくありませんか。感じ方は人それぞ  
れですが、私はとても悲しいです。悲しい思いをする人が  
この世界にはたくさんいます。そんな人を少しでも減らす  
ためには、一人一人が、行動することが大切だと思います。  
障がいの有無で差別されてしまう社会を改善するのが、  
今の世界の課題だと思います。一人一人が自分らしく生き  
ていける社会が未来にあることを願っています。



## 宿題は必要か、またどうあるべきか

本宮中学校 三年 下西 楓太

みなさんは宿題がめんどくさいと思ったことはありませんか。おそらくそう思ったことがある人は多いのではないのでしょうか。今回僕は宿題について調べて考えました。宿題の目的を明確にし、現状宿題は効果があるのかをアンケートや研究結果を元に、メリットデメリットを整理し、宿題は必要か、またどうあるべきかについて考えました。

まず始めに宿題の目的について明確にしていきます。宿題の目的について調べたところ大きく分けて三つの目的が分かりました。一つ目は学校で習ったことの復習として知識を定着させる役割。二つ目は家庭学習の習慣を身につける。三つ目は決められた課題やタスクをこなせるようになることです。ではこの目的は達成できてい

るのでしょうか。一つ目は達成できていないと思います。その理由はまず学校で習ったことが分かっている前提になることです。分かっている場合復習にならないからです。二つ目の学習習慣を身につけるは達成できていないと思います。その理由はそもそも宿題と勉強は違うものだと思うし、する側の気持ちも宿題はやらされてやるものだけ、勉強は入試に合格するために、テストで高得点をとるためになどする側の目的が違うので宿題によって学習習慣が身につくかと言われると身につかない人のほうが多いからです。三つ目の課題やタスクをこなせるようになるという目的は達成できると思います。このように目的とその効果については本来の目的を達成できていないことも多いので、ここでは宿題が効果的とはいえないでしょう。

次に宿題のメリットデメリットを整理し、宿題が必要かどうかを考えていきます。まずメリットは大きく分けて二つあり「家庭で学習する時間を確保させることができ

きることと授業での取り残しを補強できること」です。デメリットは「子どもたちの心と体を疲弊させる、また子どもの自由時間が無くなる。宿題をこなすのが作業化し、学習⇨作業という悪い価値観を与える。宿題が作業化するので、ページを埋めたり、答えを写したりするこ  
とが増え、意味のある学習にならず時間の無駄となる。自律的に家庭学習をする習慣がつかない。」など多くのデメリットがあります。またメリットも可能性でしかないため絶対に効果があるわけでもないのです、ここでは効果的とはいえないでしょう。

これまでのことをまとめると、宿題には目的があるがその多くは達成されておらず効果は少ない。またデメリットも多くメリットも可能性の一部であるため効果は少ない。このようなことから宿題は必要ないと考えます。ここからは宿題を無くしてどうしていくべきかです。ここで僕はワーク等教材を用意して週一程度でテストを行うことが良いと思います。その理由は自分から目的

を持つて勉強できるからです。例えばテストがあることで成績のためなどといった目的を自分で設定し学習できるので宿題よりも確実に成績が上がるのが期待できます。

このようなことより宿題は必要かまたどうあるべきかについて考えました。僕の結論としては「宿題は必要ない、また教材は用意し定期的にテストを行う」という考えに辿り着きました。この話題は色々な考えがあると思いますが、より良い宿題のあり方になってほしいと思います。



少年メッセージ2024

～西牟婁地方作品集～

発行者 西牟婁地方青少年育成  
市町民会議連絡協議会

発行日 2024年9月